

【 84 】

氏 名	小 室 光 こむろ ひかる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 209 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 6 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	医 学 研 究 科 生 理 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	家兎胸腺のリンパ節、筋肉、肝臓内自家移植について
論文調査委員	(主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

胸腺はリンパ組織の一つにあげられているが、リンパ節とは発生学的に異なり、また構造上多くの点で異なる。胸腺細胞についてもその起原、分裂頻度、生存期間、他細胞への分化能、免疫、機能など多くの点からリンパ節など他のリンパ組織で作られるリンパ球と区別されようとしている。従来胸腺研究の一方として用いられた移植には皮下、前眼房、筋肉、脾臓などが移植部にえらばれてきたが、いまだリンパ節に移植を試みたものはない。胸腺のリンパ節内移植は他部位に移植した場合と較べいかなる運命をたどるであろうか。本研究は体重 1.0~2.0kg の家兎胸腺を同じ動物の膝窩リンパ節内に移植し、移植後6時間より6カ月まで移植後の変化を組織学的にくわしく観察し以下の結果を得た。対照として同時に大腿筋および肝臓に移植した。

- 1) リンパ節では移植 1~3 日、筋肉や肝臓では移植 3~5 日の間に再生し始めた。再生は胸腺被膜下の細網上皮細胞の増殖に始まる。
- 2) 再生組織における胞腺細胞は、移植片周囲の結合組織に新生した細い血管によって、増殖した細網上皮細胞索に外から運ばれたリンパ球に由来する。リンパ節ではこのほか宿主であるリンパ節組織から再生組織に直接游走したリンパ球に由来する。
- 3) リンパ節では移植18日目に、筋肉では移植20日目に、肝臓ではさらにやや遅れて再生組織が小葉として認められるようになる。
- 4) 小葉形成の時期に一致して髄質の形成が行なわれる。髄質の多くは再生組織の辺縁部における細網上皮細胞の二次的な増殖に始まり遠心性に急速にひろがる。髄質のなかには、再生リンパ組織間の結合組織における細網上皮細胞の二次的な増殖に始まるものもある。
- 5) 髄質形成の始まりとほとんど同時に、増殖する細網上皮細胞のなかには速やかに変性角化するものがあって、新しいハッサル小体がつくられる。
- 6) 再生胸腺には、リンパ節に移植したものにも、筋肉や肝臓に移植したものにも二次小節はつくられな

かった。リンパ節における再生胸腺組織には、リンパ節組織に外見上自然に移行するかのときとところがみられた。宿主リンパ節組織に侵入した細網上皮細胞がここで増殖し、ハッサル小体様の構造をつくったところがみられた。

7) 移植20日例の再生胸腺のなかに腺終末様構造や、肝臓様構造を示すところがあった。

論文審査の結果の要旨

本研究では胸腺のリンパ節内移植後の態度を追究するのが目的であるが、対照として筋肉内、肝臓内自家移植実験がこころみられた。その結果、1) 移植組織の再生はリンパ節の方がはやく、いずれの場合も移植胸腺被膜下の細網上皮の増殖にはじまり、リンパ球（胸腺細胞）は移植片周囲に新生した細血管によつてはこばれたものが主体で、リンパ節移植の場合は、周囲リンパ組織から再生組織に直接遊走したリンパ球もその一部をなす。かくして再生胸腺組織は小葉形成をはじめが、その時期はリンパ節がもっともはやく、筋肉、肝臓の順である。

2) 小葉形成の時期にほぼ一致して、再生組織の周辺部の細網上皮の増殖がはじまり、遠心性に髄質の形成がおこり、ほとんど同時に上皮の変性角化によるハッサル小体の形成がみられる。

3) どの部に移植したばあいも、再生胸腺内に二次小節の形成はみられなかった。

4) 再生胸腺のなかには、上皮細胞の腺終末様な構造や肝臓様細胞配列を示すものがみられたが、これは細網上皮の内胚葉由来をものがたるものである。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認める。